

神奈川 芸術プレス

vol.160

KANAGAWA ARTS PRESS

2022年(令和4年) 3月25日発行



特集

緊急事態のなかで

巻頭インタビュー 長塚圭史 (KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督)

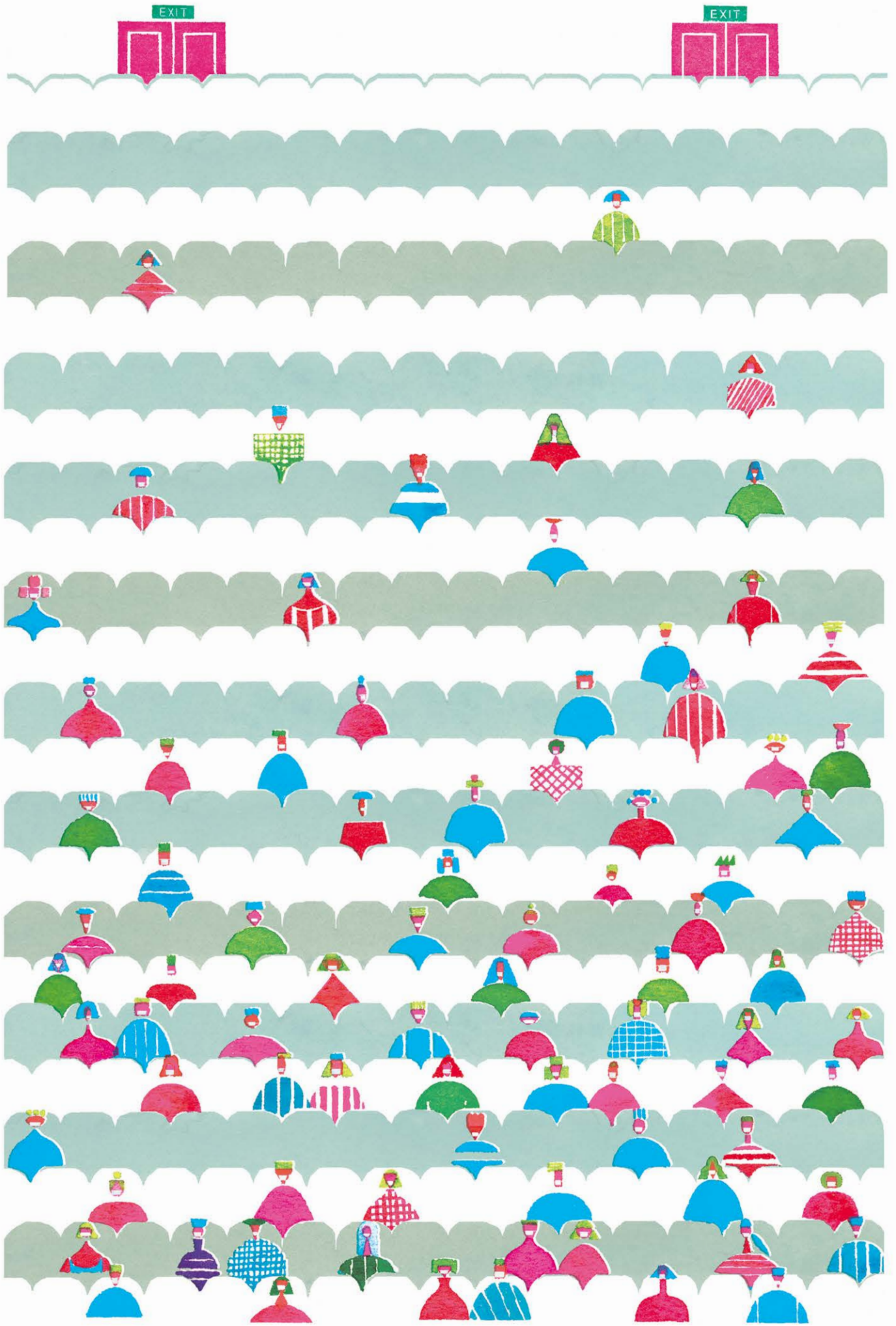
ボイス 岡田利規、テレビ神奈川(tvk)、ヨコハマトリエンナーレ2020、
神奈川フィルハーモニー管弦楽団、神奈川県立湘南高等学校合唱部

インタビュー 木村洋太 (株式会社横浜DeNAベイスターズ)、小川公代

コラム 吉本光宏 ほかにアートシーンプレイバック、C×(シー・バイ)シリーズ、公演の舞台裏



公益財団法人
神奈川芸術文化財団



04 特集

緊急事態のなかで

05 巻頭インタビュー

演劇の魅力を伝えたい——コロナ禍で生まれた熱

長塚圭史 (KAAT 神奈川芸術劇場 芸術監督／劇作家・演出家・俳優)

08 ボイス

コロナ禍でのあゆみ —5つの現場から—

1. 岡田利規 (演劇作家・小説家・チェルフィッチュ主宰)

2. テレビ神奈川 (tvk)

3. ヨコハマトリエンナーレ2020

4. 神奈川フィルハーモニー管弦楽団

5. 神奈川県立湘南高等学校合唱部

14 インタビュー

木村洋太 (株式会社横浜 DeNA ベ이스ターズ 代表取締役社長)

小川公代 (英米文学研究者／上智大学外国語学部英語学科 教授)

16 コラム

新型コロナが問いかける国際文化交流——TPAM／YPAMから考えたこと 吉本光宏 (ニッセイ基礎研究所 研究理事)

17 連載

REGULAR FEATURE

18

アートシーンプレイバック

2021年度の美術プログラムをふりかえる

文：中野仁詞 (キュレーター／神奈川県民ホール・KAAT 神奈川芸術劇場)

2021年度の演劇プログラムをふりかえる

文：河野桃子 (ライター)

22

C×(シー・バイ)シリーズ

C×C作曲家が作曲家を訪ねる旅

——作曲家・川上統がサン・サンスを訪ねて

(公財) 神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

23

公演の舞台裏

舞台字幕制作者編 加藤リツ子

神奈川芸術プレス | 読者アンケート

(公財) 神奈川芸術文化財団について

1993年10月に設立された神奈川芸術文化財団は、以下3つの県立文化施設の運営と、芸術文化の創造・普及に一体的に取り組んでいます。

神奈川県民ホール



神奈川県民ホール (以下、県民ホール)

1975年、全国屈指の大型文化施設として開館。大型の舞台機構を備える大ホール、オルガンが設置された小ホール、ギャラリー、会議室等を有する多目的ホールです。オペラ、バレエ、コンサートから各種大会・式典、美術作品の展示まで、多彩な催しが行われています。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町3-1
TEL : 045-662-5901 (9:00~17:00)
<https://www.kanagawa-kenminhall.com/>

2022年度ラインアップはこちら

https://www.kanagawa-kenminhall.com/news_detail/1929

KAAT 神奈川芸術劇場



KAAT 神奈川芸術劇場 (以下、KAAT)

2011年、モノをつくる(芸術の創造)、人をつくる(人材の育成)、まちをつくる(賑わいの創出)の「3つのつくる」をテーマとする創造型劇場として開館。最大約1,200席のホールの他に、大スタジオ(約220席)と、3つのスタジオを有します。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL : 045-633-6500 (10:00~18:00)
<https://www.kaat.jp/>

2022年度ラインアップはこちら

https://www.kaat.jp/news_detail/1925

木のホール

神奈川県立音楽堂



神奈川県立音楽堂 (以下、音楽堂)

1954年、公立施設としては日本で初めての本格的な音楽専用ホールとして開館。前川國男設計による戦後モダニズム建築の傑作として評価されています。ホールの壁面はすべて木でつくられ、その美しい響きで愛されています。2021年に神奈川県重要文化財に指定。

〒220-0044 神奈川県横浜西区紅葉ヶ丘9-2
TEL : 045-263-2567 (9:00~17:00 月曜休館)
<https://www.kanagawa-ongakudo.com/>

2022年度ラインアップはこちら

https://www.kanagawa-ongakudo.com/news_detail/1939

緊急事態のなかで



コロナ禍で直面した問い

時間と空間をともにすること、移動すること、対話すること。芸術文化がよりどころとするこのような体験は、“当たり前の日常”ではなくなってしまいました。今からほんの数年前に、新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナウイルス）の感染拡大という未曾有の事態を、誰が予測できたでしょうか。

人々が集い、文化的な体験をともにする劇場・音楽堂や美術館、スポーツ観戦をするスタジアムなどでは、プログラムの中止や延期、オンラインでの実施、収容人数を制限しての開催など、様々な対応に追われました。

今号では「緊急事態のなかで」をテーマに、芸術文化に携わる人たちがどのような思いで、どのように現状と向き合ってきたか、様々な現場取材しました。いずれも感染症対策はもろんのこと、芸術文化を届けたいという思いから生まれた、たくさんの努力や創意工夫がありました。

芸術文化は不要不急の存在なのか、オンラインで“体験”することはできるのか……。コロナ禍で、多くの人が直面したこれらの問いに対する、複数の声と視点をお届けします。

長塚圭史

KAAT神奈川芸術劇場
芸術監督

劇作家・演出家・俳優

演劇の魅力を伝えたい

——コロナ禍で生まれた熱

KEISHI NAGATSUKA



聞き手・文：編集部
写真：加藤 甫

KAATで白井晃・前芸術監督時代から

芸術参与として関わり(2019年4月～2021年3月)、

コロナ禍の2021年4月、

芸術監督に就任した長塚圭史。

2021年度の年間プログラムにシーズン制を導入し、

一年目のシーズンタイトルを「冒^{ぼう}」⁽¹⁾と名づけ、

「劇場をひらく」ことに注力しました。

様々な制約から、その実現も容易ではなかった一年。

考えていたことやチャレンジしたことをふりかえります。

——芸術参与の期間からコロナ禍をはさんで芸術監督になり、KAATでやろうと考えていたことに変化はありましたか？

僕が芸術監督の仕事を具体的に意識しはじめるようになったのは、ちょうどコロナ禍が始まった頃、2020年の春頃でした。一年後の船出を考え、具体的にプログラムを組みはじめ、劇場が新型コロナウイルスで閉館を余儀なくされた時期だからです。その頃、国からのイベント自粛要請に対して演劇関係者が発言をするたびにネット上で大きな物議をかもすと

いった状況がありました。日本では、演劇を必要としているのはごくごくわずかな演劇好きの人たちで、文化としてはほとんど認められていない可能性が高いのだと、その時にあらためて感じて。演劇関係者が何か口にするたびに「違う」と言われるのは悔しかった。「この状況をどうにかしたい」という熱が、僕のなかでも生まれました。

2020年度の始まりは新型コロナウイルスの影響により、劇場内外の人と会って話をする時間がほとんどありませんでした。劇場内でも僕が思い描いていたコミュニケーションが遮断されてしまったことは想定外でした。ね。必然的に自分で考えなければならぬ時間が増えました。

参与の時には、物理的な場として劇場に「来てもらう」こと、劇場がどうあるべきかを意識していたと思います。ですがコロナ禍を経験してからは、演劇や舞台芸術について人々がどのように考えているかという、より本質的な問いにフォーカスが移っていったといえるかもしれません。演劇が文化としてまだ認められていないと感じたのであれば、どのようにひらき伝えていけばよいか。未曾有の事態は、僕がKAATという公共劇場において何をしなければならぬのかを深く考えるきっかけになりました。



——2020年2月以降、公演の中止や延期、収容人数を制限しての上演、上演する際の徹底した感染対策など、様々な困難を経験しました。そんななか、舞台表現の可能性についてはどう感じていましたか？

目の前にお客様がいて、初めて演劇という表現が成立することを、これほどまでに強く認識させられたことはありませんでした。当たり前のことではありますが、お客様は僕らが演技をする対象となる人たちです。2020年6月に下北沢のザ・スズナリで上演を予定していた新ロイヤル大衆舎の公演²が、4月の緊急事態宣言によって中止になりました。何かしようと、毎日違う作品のリーディングを配信することになった時に、そのことを痛感したんです。公演の稽古は、物理的に会うことがで

きる状況ではなかったもので、LINEのグループで音声通話を利用して行いました。ですが稽古をすればするほど、お客様のいない映像配信という表現に「これでいけるのかな」というもやもやとした不安を抱えて

いきました。そんなある日、小劇場の感染症対策ガイドラインにもとづいて、お客様も30人前後入れられるかもしれないと聞いた時、僕らの表情がガラッと変わって。それを待っていたんですね。配信は、劇場には足を運べない人たちと出会うことができる、新たにひらかれた有意義な方法です。でも配信の向こう側にいるお客様の反応をつかみとることは困難です。やはりたとえ半数だったとしても、お客様がそこにいることの力、その価値の大きさをあらためて実感することになりました。劇場

は、出演者やスタッフとお客様、そこに居合わせた人たちの関係性が生まれる場であり、特別な体験ができる場所なのです。

——芸術監督に就任してから一貫して取り組んだ「劇場をひらく」ことについて、お考えを聞かせてください。

繰り返になりますが、コロナ禍で切実に思ったのが、演劇の魅力を知っている人がどれだけいるのだろうかということでした。より多くの人たちに、劇場での特別な体験、劇場で起きるマジックを知ってほしい。あなたがなければ、このマジックは起きないのです。そのためにはすでに演劇の魅力を知っている方々以外へも、扉をひらいていかなければなりません。そこで劇場のなかだけで完結しないように、時間がかかったとしても様々な場所に出かけていき、いろいろな人に出会っていくことが、極めて地道ながらも一つのやり方になるのではないかと考えました。それが「冒」メインシーズンのラストを飾る「KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト」として、かたちになっていきます。

また劇場の新たな広報誌として、季刊誌『KAAT PAPER』を創刊したのも一つの挑戦です。芸術監督が考えていることや、劇場がある地域のこと、お客様の声など、ひらかれた

長塚圭史 ながつか・けいし

劇作家・演出家・俳優。1975年生まれ。早稲田大学在学中に「阿佐ヶ谷スパイダース」を結成し2018年に劇団化。2011年ソロプロジェクト「葛河思潮社」を、2017年には「新ロイヤル大衆舎」を始動。2019年4月よりKAAT 神奈川芸術劇場芸術参与。2021年4月、KAAT 神奈川芸術劇場芸術監督に就任。

- 1 春から夏をプレシーズン(6プログラム)、秋からをメインシーズン(10プログラム)と位置づけ、劇場に季節感とリズムを取り入れた。「冒」という言葉は「飛び出す、はみ出す、突き進む」という意味をもつ。未知なる世界へと踏み出す勇気と、既成概念を打ち壊す芸術の原点というコンセプトが込められている。
- 2 森本薫作「無法松の一生～富島松五郎傳～」、岸田國士作「麵麩屋文六の思案」に「知らん」の文六の同時上演(構成台本+演出:長塚圭史)が中止となった。この時に「緊急事態軽演劇八夜」と銘打ち、読み語り芝居を動画配信。東京都内の小劇場における新型コロナウイルス感染症対策ガイドラインにもとづき、35席ほどの観客席を販売した。
- 3 初演は2017年。KAATでは劇場1階のアトリウムに設置した特設劇場にて上演。劇場そのものを、大通りから丸見えのアトリウムに引っ張り出して挑んだ“大衆演劇”となった。
- 4 『西遊記』を原作とした戯曲。一行が天竺を目指す道中で神奈川県に迷い込み、県内各地域の伝説や昔話の世界を旅する冒険譚。長塚圭史が上演台本・演出・出演を務める。
- 5 公演関係者に新型コロナの陽性が確認されたため、ツアー公演の一部が中止となった。



芸術監督就任2年目となる2022年度

メインシーズンのタイトルは「忘」。

私たちは猛スピードで進む現在に立ち、
大切なことをどんどん忘れていきます。
人間は忘れる生き物。
忘れるという罪を背負っているのかもしれない。
時に自ら目を逸らし、
積極的に忘れることもあります。
忘れることは力に変わります。
忘れない。忘れられないこともあります。
数々の災害、コロナ禍の中で、
人々はどうかましく歩んできたのか。
広大な記憶の荒野に立ち、私たちは今、何を思うのか。

ラインアップはこちら

https://www.kaat.jp/news_detail/1925



新ロイヤル大衆舎×KAAT『王将』—三部作—。KAAT アトリウム特設劇場での再演【2021年5月～6月⁽¹⁾】
作：北條秀司 構成台本+演出：長塚圭史 写真：細野晋司

誌面づくりを目指しました。『KAAT PAPER』に限らず、劇場とはどういう場所なのかということはいかにして伝えていくかということは、引き続き考えていく必要がありますね。もちろん、芸術性の高い作品をつくっていくことも続けています。プログラムを考える時には、「閉じていないか？ ひらいていく力はそこにあるか？」という視点でしっかりと精査をしました。

——「KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト」はどのような企画ですか？

僕が芸術監督就任後、初めて書き下ろした新作『冒険者たち』JOURNEY TO THE WEST⁽²⁾が、KAATを皮切りに、川崎、相模原、大和、厚木、小田原、横須賀と県内6都市をめぐるプロジェクトです⁽³⁾。このプロジェクトは5年で3回行うことを目指しています。一年目はまずは各地に赴く。そこで新たなお客様と出会い、演劇の魅力を伝えていきます。回を重ねるごとに、公演会場をどんどん増やしていくことができます。できればいいのですが……そのぐらゐの気持ちで取り組んでいます。各地の劇場、お客様との関係性をどのようににつくっていくかということについては僕も悩みながら、まずは一回やってみて、試行錯誤しながら継続していききたいですね。

今回は自分も劇作家として神奈川県のことを勉強しながら、昔話や言い伝えを物語に反映しました。劇作をするプロセスのなかで、県内の様々な場所を訪れ、まちを知ることができると面白。

またこのプロジェクトが、各地の



『冒険者たち ～JOURNEY TO THE WEST～』（KAAT 中スタジオ） 写真：宮川舞子

公共劇場とどのように共同製作ができるかを考える足がかりになればとも思っています。県内にとどまらず、ゆくゆくは国内各地の劇場と、発想やクリエイションがつながり合うような交流がもてるようになるという

ですね。

——新型コロナウイルスの影響があったなか、新聞や雑誌における演劇ジャンルの一年をふりかえる記事では、KAATの公演が取り上げられることが多い年になりました。

とても多くの媒体で取り上げていただいています。たぶん今の社会と、KAATでのチャレンジが合致したからではないでしょうか。この状況下では各地の劇場が、挑戦的な企画に取り組むことはなかなか難しかったと思います。そんななか、図らずもKAATは芸術監督の交代という節目、変化を求められる時期を迎えることになりました。そして劇場を「ひらく」方針をさらに推し進めることになった。僕が芸術監督になるタイミングがコロナ禍だったことは、まあ受け入れるほかありませんでした。これまでにやったことのない立場ですから、何とも比べられません。やれることをコツコツと、時に大胆に積み重ねていければと思います。

コロナ禍 での あゆみ

—5つの現場から—

VOICE

2020年に瞬く間に世界に広がった新型コロナ。感染拡大当初は、演劇や美術、音楽などの文化芸術活動は「不要不急」と捉えられ、劇場やホール、美術館の多くは休館という対応をとりました。活動を再開した現在もマスク生活が長引くなか、いかにしてリスクを減らしながら文化的活動を行い、心の豊かさを保つのか、人々の試行錯誤が続いています。

本コーナーでは、公演の延期を余儀なくされた演出家や、地域に根ざした番組を制作するテレビ局、国際的にも注目される展覧会を実施する組織など、演劇や、音楽、美術、エンターテインメント、そして教育、と幅広い分野の方々から取り組みを聞きました。どんな困難と向かい合い、歩みを止めなかったのか。神奈川県内での5つの現場の声をお届けします。

1 KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース『未練の幽霊と怪物—「挫波」「教賀」—』より(写真：高野ユリカ)

2 テレビ神奈川の番組「プレイバック! 横浜 DeNA ベイスターズ熱烈LIVE」実況中継の様子

3 エヴァ・ファブレガス《からみあい》2020年 ヨコハマトリエンナーレ2020展示風景 (写真：大塚敬太／写真提供：横浜トリエンナーレ組織委員会)

4 神奈川県民ホールで2021年12月に行われた神奈川フィルハーモニー管弦楽団のベートーヴェン「第九」公演より

5 神奈川県立湘南高等学校合唱部の音源審査によるコンクールのための録音風景

岡田利規

岡田利規 [おかだ・としき] (演劇作家・小説家・チェルフィッチュ主宰)

1973年横浜生まれ、熊本在住。従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。2020年ミュンヘン・カンマーシュピールのレパトリー作品『The Vacuum Cleaner』がドイツの演劇祭 Theatertreffen (テアター・トレッフェン) の“注目すべき10作品”に選出。

取り組み概要

夢幻能⁽¹⁾の構造を借り、ザハ・ハディド⁽²⁾をシテに描く『挫波』と、高速増殖原型炉「もんじゅ」をめぐる『敦賀』の2作で構成される音楽劇『未練の幽霊と怪物—「挫波」「敦賀」—』。当初、2020年6月に予定されていた公演は新型コロナウイルスの影響により延期を前提とした中止となりました。その後、リモートで行われた稽古の成果が『「未練の幽霊と怪物」の上演の幽霊』として6月末にオンラインで上演され、7月に出版された戯曲は第72回読売文学賞(戯曲・シナリオ賞)と第25回鶴屋南北戯曲賞を受賞。1年を経た2021年6月ようやく劇場での上演が実現します。リモートでの稽古とオンライン上演、そしてあらためての劇場公演を通して考えたことを、作・演出の岡田利規さんに聞きました。

聞き手・文：山崎健太

劇場で上演された『未練の幽霊と怪物—「挫波」「敦賀」—』(2021年) 写真：高野ユリカ



オンライン上演された『「未練の幽霊と怪物」の上演の幽霊』(2020年) 写真：高野ユリカ

- 1 能は、現実の世界に生きる人々のみが登場し時間の経過とともに進行する「現在能」と、霊的な存在が主人公(シテ)となり、現実と異世界、過去と現在を行き来しながら物語が進む「夢幻能」に大きく分けられる。
- 2 イラク出身の建築家(1950-2016年)。2004年、建築界のノーベル賞とも称されるプリツカー賞を女性で初受賞。2012年新国立競技場(東京)のコンペで設計者として選ばれ脚光を浴びながらも、のちにその採用を白紙撤回され、それからほとんど没した。

海外公演のための出張中にオンラインでインタビューを受ける岡田利規さん

——公演中止が決まった時、何を考えましたか？

中止は延期を前提としたものだったので、それならクリエイションを進めておきたいとまずは思いました。延期ということはより時間をかけられるということでもあるので。それで、リモートで稽古をしました。クリエイションの前半、コンセプトや方法論を試したり共有したりという段階については、オンラインでも十分にできることがある

——オンラインでの上演についてはいかがでしたか？

必要に迫られてオンラインで上演するための形式を考えるということとそれ自体は楽しくもありましたが、できることにはやはり限界がある。一番大きいのはやる側のモチベーションです。『未練の幽霊と怪物』の上演の幽霊』では、テーブルの上に小さいパネルを

というのが、やってみての実感です。

置いて、それに出演者の映像をプロジェクションするというかたちで上演を行いました。オンライン上演でも「舞台」は必要だと思ってそういう形式にしたんですけど、でもそれはやはり同じ空間にいるのとは違う。共演者が同じ舞台上にいて、生で演奏のバイブレーションを感じて、何より、同じ空間に観客がいることで到達できる地点があるということであらためて感じました。

――コロナ禍により、エンターテインメントの発信にも影響がありましたね。

「こんな時だからテレビで元気を」という声もあり、葛藤しました。エンタメは娯楽でもあるし、和みを与えたりもします。ロケ番組の代わりに、楽しい過去映像を再放送するといった工夫をしました。特に人気だったのが、野球の試合です。過去の中継映像の再放送は、試合ができなかったコロナ禍だからこそ思いついたアイデアでした。SNSで「ピザを食べながら逆転劇を見て盛り上がりました！」などの声をいただきました。もちろんリアルタイムでの観戦にはかなわないですが、SNSとテレビがどうやって一体感を出していくかを意識しました。

――県内のエンターテインメントをリードする企業として、役割や目標は？

ローカルテレビ局は、番組とイベントを連動させて県民の皆さんに番組を身近に感じていただくことが大切です。イベントを開催することでより親しみをもってもらいたい。一方でライブや公演を開催するには、ホールの方、観客、主催者などが一体にならないと実現することができません。tvkとしては、CM放送などの広報的な支援で少しでもお役に立てるようにサポートしています。50周年では多くのイベントに取り組み、盛り上げていきたいですね。



「テレビホームルーム かながわの子どもたちへ」では
教員が子どもたちへの教育指導を行った



取り組み概要

2022年に開局50周年を迎えるテレビ神奈川(tvk)では、イベントを実施しようという矢先に新型コロナが流行し、イベントは軒並み中止に。通常の収録やロケもできず、再放送を余儀なくされました。そのなかで盛り上がったのが、横浜DeNAベイスターズ戦の過去の中継映像をふりかえる番組です。当時の実況と解説の音は活かしつつ、生放送でアナウンサーとゲストがチームにまつわるトークをし、見応えのある試合をもう1回楽しむ構成で、Twitterのトレンドワード全国1位になるなど大きな話題になりました。ほか、神奈川県黒岩知事が頻繁に生放送に出演して県民の質問に答えたり、緊急事態宣言により休校中の小中学生の授業を放送することで、インターネット環境がない児童や生徒も授業が受けられるようにするなど、地域への貢献にも努めました。1994年に入社し、2020年のコロナ禍に代表取締役社長に就任した熊谷典和さんにお話を伺いました。

聞き手・文：河野桃子

株式会社テレビ神奈川(tvk)

神奈川県独立局であるローカルテレビ局。県内ニュース、横浜DeNAベイスターズ中継などのスポーツはもちろん、各種イベントなども多数展開。地元の情報を伝えることに力を入れ、地域情報バラエティ番組「猫のひたいほどワイド」や音楽情報バラエティ番組「関内デビル」など独自の番組制作も行っている。2022年4月に開局50周年を迎える。周年コンセプトは「感謝のカタチ」。



話題になった「プレイバック! 横浜DeNAベイスターズ熱烈LIVE」

熊谷典和さん 写真：大野隆介



テレビ神奈川(tvk)

VOICE
2

蔵屋美香さん
写真：大野隆介

取り組み概要

新型コロナの感染拡大でヴェネチア・ビエンナーレをはじめ、世界の国際展が延期や中止を余儀なくされるなか、2020年7月から開催されたヨコハマトリエンナーレ2020「AFTERGLOW－光の破片をつかまえる」。インド出身のラクス・メディア・コレクティブ⁽¹⁾をアーティスティック・ディレクターに迎え、世界各地から69組のアーティストが参加しました。コロナ禍でどう展覧会を開催するのか世界中が手探りの状況で、日時指定の事前予約制などをいち早く取り入れた現場では、どのような取り組みがなされていたのでしょうか。2020年4月に横浜美術館館長・横浜トリエンナーレ組織委員会副委員長(現・総合ディレクター)に就任した蔵屋美香さんに聞きました。

聞き手・文：編集部



オンラインで海外のアーティストとつなぎ展示作業を進める様子
写真：大塚敬太 写真提供：横浜トリエンナーレ組織委員会

調整ができました。また、体験型の作品をどうするかは全体のコンセプトに関わる大きな課題でした。最終的には、一部の作品を予約制にし、都度消毒をすることで、アートにおける「触る作品」の価値を示すことができたと思います。

——ラクスが掲げた「独学」「発光」「友情」「ケア」「毒」というキーワードも、コロナ禍に重なる部分がありますね。

「毒」との共生など、コロナ禍前にはわかりづらかったものが、今や誰にでも理解できてしまう。展覧会が開催できたという点でも、アートが追いかけてきたテーマが現実と重なったという点でも奇跡的でした。物事を考える感覚が高まっている時に作品を見る経験が多くの方にしてもらったことには、大きな意義があったと思います。

ヨコハマトリエンナーレ2020 「AFTERGLOW－光の破片をつかまえる」

2001年から3年に一度行われている現代アートの国際展。7回目となった2020年は、横浜美術館とプロット48をメイン会場に開催(7月17日～10月11日)。展覧会と並行した「エピソード」の動画配信やバーチャルツアーなど、オンラインで鑑賞できるコンテンツも多く提供した。



ヨコハマトリエンナーレ2020展示風景より
ニック・ケイヴ《回転する森》2016年(2020年再制作) ©Nick Cave
写真：大塚敬太 写真提供：横浜トリエンナーレ組織委員会

——海外からディレクターやアーティストも来日できないなか、どのように展覧会をつくり上げていったのでしょうか。

2020年5月に開催を決めた時、横浜市の方針が揺るがなかったのは大きかったです。施工や展示作業が密にならないように開幕を2週間延期し、スマホやPCを手にオンラインでディレクターやアーティストとつないで準備を進めました。彼らの一部はコロナ禍前に一度は会場に足を運んで空間を把握していたので、「あと何センチ右に」といった綿密な

1 インド・ニューデリー生まれのジーベシュ・バグチ、モニカ・ナルラ、シュッダプラタ・セーングプタの3名により、1992年に結成されたアーティスト集団。横浜トリエンナーレで初の外国人によるアーティスティック・ディレクター。

神奈川 フィルハーモニー 管弦楽団

VOICE
4



取り組み概要

神奈川フィルハーモニー管弦楽団

1970年に発足。2020年に創立50周年を迎えた。神奈川県内を中心に演奏活動を続け、質の高い演奏と地域に根づいた活動で支持を拡大。音楽堂と県民ホールで定期演奏会を開催するほか、学校や地域で年間約150回以上の演奏会を開いている。2022年4月に沼尻竜典が音楽監督に就任する。



田賀浩一朗さん 写真：大野隆介



2020年3月に配信された「デリバリー・コンサート」の収録の様子

神奈川フィルハーモニー管弦楽団にとって2020年は創立50周年のアニバーサリーイヤーでした。しかし2020年3月6日・8日に予定されていた定期演奏会は中止となり、また常任指揮者・川瀬賢太郎さんのたつての希望で計画していた「マーラー／交響曲第8番『千人の交響曲』」の演奏会は、合唱の練習が不可能になり、舞台上のソーシャルディスタンス確保が困難であることから、実施ができませんでした。収容人数制限がありながらも定期演奏会が再開できたのは2020年8月のことでした。生演奏を披露する機会を奪われながらも、公式YouTubeチャンネルを活用して楽団員の生の声や演奏を届ける取り組みを活発に行って、ファン層の拡大に結びつけたという思わぬ効果もあったそうです。同管弦楽団営業部広報の田賀浩一朗さんにお伺いしました。

聞き手・文：猪上杉子

—2020年8月にお客様を迎えての演奏会を再開できた時はどのように感じましたか？

定期演奏会を再開すべきかどうか葛藤もありましたが、終演後に半数の客席からいただいた拍手がまるで満員の会場のように大きく聞こえ、感激しました。生演奏がもたらす感動がわきあがる様子に、どんなに感染対策の準備が大変でも「生の音楽を届け続けなければならない」と感じました。

—コロナ禍で新しく始めたことはありますか？

2020年3月に定期演奏会の中止が決まった時に楽団員のなか

から「動画配信で音楽を届けた

い」と声上がり、スタッフも賛

同して、練習場であるかながわ

アートホールで室内楽を収録しま

した。「デリバリー・コンサート」

と題して、演奏の合間などには

オーケストラの現状を伝える楽団

員やスタッフの声も交え、公式

YouTubeで配信したところ、大き

な反響をいただきました。この1

年半あまりで60本近くの動画を配

信し、6千人の登録者数となり、

3万回を超える再生回数を得た動

画もあります。遠方にお住まいの

方や、これまでオーケストラを聴

いたことがなかった層にもファン

が広がったと実感しています。

—コロナ禍を経験して、オーケストラや音楽の果たす役割は変わりましたか？

2011年の東日本大震災の時も、今回も、音楽の重要性をより強く感じたと思います。音楽を通じて心がより豊かになることを、幅広い世代にも感じてもらえる機会を増やしていきたいです。

神奈川県立湘南高等学校合唱部

2021年、神奈川県立湘南高等学校は100周年、合唱部は創部75周年を迎えた。合唱部はこれまでに数多くの音楽家を輩出している。2022年3月27日に、創部75周年を記念した春の定期演奏会を、鎌倉芸術館大ホールにおいて開催。

神奈川県立 湘南高等学校合唱部

取り組み概要



パリの伝統的なダンスと歌が特徴的な合唱曲「Janger」を披露する様子

2020年2月の神奈川県合唱フェスティバル(音楽堂)への参加から半年間、リアルな場に集まって練習ができなかった湘南高校の合唱部。発表会の再開は、さらに7ヶ月後の2021年3月でした。練習の再開当初も人数制限があったため、部員全員(70~80名)が一つの部屋に集まることはできません。複数の部屋に分かれたり、屋外でも練習をしました。マスクをつけて歌うことも、苦勞が伴うものでした。部員同士の対話がSNS中心となったためコミュニケーションのすれ違いも経験することに。一方で、「バーチャル開放区2020」⁽¹⁾への応募は一つの転機になりました。できることをやろうと取り組んだ作品がみごと入選を果たし、部員たちに連帯感が生まれるきっかけになったのです。今回の取材では、湘南高校合唱部顧問の岩本達明先生と、2年生で部長を務める小林 颯さんにお話を聞きました。

聞き手・文：編集部 写真：大野隆介

——海外の合唱団との交流も盛んに行われていたが、2020~2021年度は実現が難しかったですね。

岩本 楽しみにしていた演奏会がなくなり、生徒たちはつらかったと思います。卒業する3年生は、最後のコンクールも中止で心のダメージも大きかった。Zoomの活用は、そんな思いを語り合うことから始めましたね。「音楽を続けたい」生徒たちの発案で、Zoomで練習をしたり、インスタライブをしたりしましたが、オンラインだと音のズレがあるため一緒に歌うことは難しい。

——2020年4月入部の小林さんにとって、コロナ禍はどのような時期でしたか。

小林 活動が何もないところからのスタートでした。みんなで歌えた時は、その分喜びが大きかったです。発表会は、歌う側もお客様もほんとうに楽しそう。客席には泣いている方もいました。機会が限られていたからこそ、合唱の素晴らしさを強く感じた2年間になりました。

岩本 コロナ禍では、先輩と後輩の上下のつながりなど、いろいろなものが切れてしまいました。それでも活動を止めてしまうと、再開するエネルギーすらわかないんじゃないかな。「バーチャル開放区」への応募では、初めての映像編集でしたが熱心にチャレンジして。このようにその時できることを、細々とでもやり続けることがステップになると感じました。



岩本達明先生(左)と、部長の小林颯さん(右)



株式会社奥山の合唱用マスク(手前)と、東京混声合唱団が開発したマスクを生徒が縫って手直したマスク(奥)

1 文化芸術オールジャンルの動画を募集し、配信する神奈川県による取り組み。応募244作品のなかから入賞4作品を決定、湘南高校合唱部は「県民賞(特別賞)」を受賞した。

県民ホールやKAATと同じ関内エリアに本拠地をもつ横浜DeNAベイスターズ。

野球ファンにとどまらない集客を誇る球団が、
コロナ禍であらためて見据えた「業界をリードする」思いについて、
代表取締役社長の木村洋太さんに伺いました。

—2021年4月に代表取締役社長に就任され、どのような1年でしたか？

チームの成績とビジネス、いずれも厳しい1年でした。コロナ禍以前は、入場料とグッズや飲食による収益が5割を超えていたため、昨年は赤字も抱えて。逆に仕組みを見直すチャンスと捉え、社内で議論もできました。大切にしたのはチャレンジングスピリットです。行政とともに、収容人数の規制緩和に向けた技術実証にも取り組みました。新型コロナウイルス対策も徹底しました。選手・スタッフのPCR検査、特に外食に関する制限は厳しいものでしたが、皆が「絶対にこの球団から陽性者を出さない」という思いを共有してくれて実現できました。

—チームにとって、無観客試合はどのようなものでしたか？

試合前からイメージしていたものの、いざ始まってみるとスタジアムの暗さに驚きました。物理的な光の反射や印象の問題かもしれないが、選手も張り合いがなかったと思います。無観客が5千人になっただけで色合いが変わり、半数^①になった時の光景の違いも経験しました。いまだ渦中といえるなか、すぐに満員御礼に戻るとは考えていません。球場が安全だと思っただけの対策を取り続けること、また来たいと思える満足度を高

木村 洋太 Yota Kimura

株式会社横浜DeNAベイスターズ 代表取締役社長

現代を生きる我々が人間らしくいるために、
文化的な喜びを未来につなごう



PROFILE

2007年東京大学工学系研究科航空宇宙工学専攻修士課程修了。
同年、米系経営戦略コンサルティングファームに入社。
2012年株式会社横浜DeNAベイスターズに入社。
その後、事業本部チケット営業部部長、経営戦略・IT戦略部部長、
執行役員事業本部部長、取締役副社長を歴任。
2021年4月より現職。

めることの両軸で、プロ野球の魅力をあらためて伝えていきたいです。

—スポーツや芸術文化は「不要不急」の存在として、様々な制限がありました。

文化的な営みは、人が人らしく生きていくために必要なことだと、あらためて認識するきっかけを新型コロナウイルスが与えてくれたといえます。現代を生きる我々が人間らしくいるために、文化的な喜びを未来につなごう。2021年に更新した会社のビジョンの一つに「100年先へ、野球をつなごう」があります。野球が日本に上陸して約150年が経ち、競技人口の減少や少子高齢化によって、このままでは野球文化が廃れるのではという危機感がありました。そうならないために、ベイスターズが業界全体に、国内のみならず世界的にもリーダーシップを発揮することを目指します。



収容人数約半数で開催した試合のスタジアム ©YDB

1 横浜スタジアムの収容人数(キャパシティ)は約34,000席(2022年1月現在)。

ヴァージニア・ウルフから三島由紀夫まで、

文学の領域に見る「ケア」を論じた英米文学研究者・小川公代さんの著書

『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社、2021年）が話題を呼んでいます。

芸術活動はコロナ禍でどのような役割をもちうるのか、お話を伺いました。

現在、様々な分野で注目を集めている「ケア」とは、どのような考え方なのでしょうか。

「ケア」は「正しさ」あるいは「正義」というのもいいと思いますが、その正対の態度です。これまでの社会では自立した個人像が理想とされてきましたが、実際には私たちは一人では存在できず、支え合うことでなんとか生きています。画一化された「正義の倫理」に対抗する「ケアの倫理」は、異なる他者の考えを受け入れ、うまくやっていくための方法論なのです。

生活が制限されたコロナ禍で、多くの人が生活と地続きにケアの重要性や問題を考えていたと思います。

主に女性が過剰に担わされてきたケア労働の問題が、コロナ禍で可視化されました。そこで書き始めたのが『ケアの倫理とエンパワメント』のもととなった文芸誌の連載です。中心に据えたのは、スベイン風邪が大流行した時期に活動したイギリスの小説家、ヴァージニア・ウルフでした。ウルフは健康な「直立人」に対して、病气や老いをもつ「横臥者」^①の視点から想像力をたくましくすることの重要性を書きました。「病気になるということ」こそがケアのマニフェストだと、多くの人に知ってもらいたかったんです。

PROFILE

1972年和歌山県生まれ。
グラスゴー大学博士課程修了。
専門はロマン主義文学、および医学史。
著書に『文学とアダプテーション——ヨーロッパの文化の変容』（共編著、春風社、2017年）、
訳書に『エアスミシング』（シャーロット・ジョーンズ著、幻戯書房、2018年）など。



芸術は、他者の視点という

もうひとつの可能性を切り捨てない

英米文学研究者／上智大学外国語学部英語学科 教授

小川公代 Kimiyo Ogawa



小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社、2021年）書影

1 「直立人」「横臥者」は、ウルフが1926年に発表したエッセイ「病気になるということ」で提示した概念。現在、早川書房のnoteで片山亜紀による同書の新訳が公開されている。

舞台をはじめ芸術活動のあり方も変化していますが、そのなかで変わらない価値はどこにあるのでしょうか。

ウルフは「コミュニケーション」という言葉を用いて、人がつながることの重要性を伝えています。かつてその場は教会やお寺だったはずですが、現代では劇場（演劇や音楽）がそれを生み出しているといえるでしょう。コロナ禍で「コミュニケーション」は解体されつつありますが、オンラインなどにかたちを変えて継続しています。これは病気の人や遠方に住む人にとって朗報でもあり、多様な選択肢を前向きに捉えることもできます。芸術作品は、他者の立場から物事を見て、「どのようなケアが必要か」を考える機会をもたらします。かたちが変わっても人間が互いにつながることを「ケア」として求める以上、芸術活動のともしびは消えないはずです。

新型コロナが問いかける国際文化交流

—TPAM/YPAMから考えたこと

吉本光宏(ニッセイ基礎研究所 研究理事)

観客全員がマスクをつけ、開演中はもちろん、開演前も開演後もひと言も言葉を交わすことがない。今も続くコロナ禍の劇場ではよく見られる光景だ。だが、通常とは異なるその観劇スタイルが、作品のもつメッセージをより深く、リアルにさせる体験をしたことがある。2021年2月、TPAM 2021において、KAAT大スタジオで上演された福島三部作である。

この作品はオンラインのライブ配信、録画配信、そして劇場での鑑賞という3つの形態で観客に届けられた。英語字幕付きのライブ配信には20台のカメラが使われ、客席からのアングルだけではなく、舞台の上や背後からも撮影され、オンラインでも舞台の臨場感を伝えるべく最大限の工夫が施されていた。本作は福島で生まれ、原発で働く技術者を父にもつ谷賢一が書き下ろした6時間の大作で、2020年に岸田國士戯曲賞を受賞した。筆者は、双葉町が原発誘致を進めた第一部『1996年・夜に昇る太陽』をライブ配信

福島三部作 第三部『2011年：語られたる言葉たち』(DULL-COLORED POP) 写真：前澤秀登



で、チェルノブイリの原発事故に揺れる第二部『1986年・メビウスの輪』を録画配信で、そして東日本大震災・福島第一原発事故後の第三部『2011年・語られたる言葉たち』を劇場で鑑賞した。

震災から10年目にあたる2021年に、「TPAMディレクション」としてこの作品の再演を実現させたTPAMの姿勢に大いに共感した。本来なら、日本全体で東日本大震災をもっとしっかりとふりかえるべきところ、メディアばかりか我々自身の関心も新型コロナ一色になっていたこと、そしてコロナ禍で公演を行うこと自体が容易ではなかったからである。録画配信は、映像記録を見ている感じがしたが、ライブ配信は、自宅デスクのディスプレイでも、まさしく今、行われている公演を、時折映像に映る観客と一緒に観ている、という感覚をもつことができた。そして、KAAT大スタジオの客席で鑑賞した第三部。冒頭に記載したとおり、マスク姿の無言の観客たちの存在によって、谷賢一や俳優

たちが伝えたかったことが否応なく突きつけられ、様々なことを考えさせられる、そんな舞台体験となった。そして、舞台芸術は、俳優や観客が一体となって、舞台美術や照明、音響とともに、同じ空間、同じ時間を共有することでしか真の価値を受け取ることができない、ということであらためて実感した。

福島三部作の動員数は、来場が1040名。オンラインの鑑賞者数は1528人で、26の国と地域から平均値で常時286人が視聴していたという。決して多い数字とはいえないし、オンラインでの視聴が劇場と同じ強度をもつものだったかどうかは疑問だ。しかしその公演によって、この作品の「国際的」なブレイクは高まったに違いない。TPAMの参加者には国内外の舞台芸術界のキーパーソンが少なくないからだ。

新型コロナは芸術文化に甚大な影響を与えたが、とりわけかつてない苦境に立たされたのは国際文化交流であろう。国境を越えるアーティストの移動が制限され、海外からの招聘公演や国際共同製作などは、のきなみ中止や延期に追い込まれた。TPAMのような国際的ネットワークや中間支援組織への影響は、それらとはまた質が異なるはずだ。個別の事業の中止、延期というこ

とにとどまらず、そもそも舞台芸術における国際交流とは何か、そのことにどんな意義があるのか。新型コロナによってその問いかけにより深く向き合わざるを得なくなったと思うからである。

実際、昨年12月に開催されたYPAM 2021では基調講演に「無国籍」というテーマが設定された。日本語、英語、中国語を一人で操りながら陳天璽が語った無国籍者としての彼女自身の経験と問題提起は極めて刺激的だった。さらに、陳が生まれ育った横浜中華街でのリサーチの成果を発表した「中国新生代」の振付家/パフォーマンズ作家のヤン・ジェンは、中華アイデンティティとローカル・アイデンティティのあり方を探る連作プロジェクト「Agline Town」に取り組み、次回のYPAMで世界初演する予定だという。

新型コロナはグローバル化の進展した現代社会に分断をもたらした。しかし、それと軌を一にするように登場したZoomやMicrosoft Teamsなどのオンライン会議のシステムは、インターネットの仮想空間とは違う、かといってリアルでもない新しいコミュニケーション空間をウェブ上に出現させた。世界的なパンデミックがその普及を後押しし、国境や時差とは無縁の便利なツール

として、国際交流の概念を変容させようとしている。

しかし、そうした簡便な方法が日常化すればするほど、人々が物理的に国境を越えて移動する国際文化交流の重要性は高まるに違いない。と同時に、その必要性が厳しく問われることも事実だろう。生身の身体で表現する舞台芸術の国際交流にはまさしくそれが当てはまる。

YPAMの丸岡ひろみディレクターは、トークセッションで「(新型コロナによって)国境を越えることが特別なことになってしまった。しかし、舞台芸術がライブパフォーマンスである以上、アーティストの移動を妨げるべきではない」と語った。新型コロナは、国境を越えたアーティストの移動を阻止し、「国境とは何か」という問いを我々に突きつける。しかし、その苦境を乗り越えた先に、国際文化交流の意義、そして芸術や文化そのものの新しい価値や可能性が見えてくる、と信じてい

TPAM / YPAMについて

2011年から11年間横浜で開催されてきたTPAM(国際舞台芸術ミーティングin横浜)は、アジアで最も影響力のある舞台芸術プラットフォームの一つとして国際的に知られる。2021年12月にはYPAM(横浜国際舞台芸術ミーティング)として開催。

福島三部作の再演について

福島三部作の再演は、文化庁と芸団協による文化芸術の再興支援「JAPAN LIVE YELL project」として実現。緊急事態宣言のなか、終演時間の繰り上げや座席間隔を空けての実施となり、3回の夜公演は無観客、9回の昼公演は通常の約半分の客席数となった。チケットは早々に完売、キャンセル待ちの出る状況だった。



REGULAR FEATURE

本誌では、毎号以下のコンテンツをお届けします。

アートシーンプレイバック

今号では、神奈川にゆかりのある作家の「美術」に関するプログラムや、
県内の文化施設での「演劇」の取り組みについて、
レビューと総論により、2021年度のアートシーンをふりかえります。



C × (シー・バイ) シリーズ

前号に続いて、2021年の春に始まったクラシック音楽の新シリーズ「C × (シー・バイ)」から、
「C × C (シー・バイ・シー) 作曲家が作曲家を訪ねる旅」を紹介します。



公演の舞台裏

普段は縁の下の力持ちとして様々なかたちで公演を支え、
「舞台裏」で活躍するスタッフの技術やその仕事について取り上げます。
今回は[舞台字幕制作者編]をお届けします。

2021年度の美術プログラムをふりかえる

県民ホールやKAATで展示を行った、神奈川にゆかりのある作家たちが現在、日本各地や世界で活躍しています。その様子やパフォーミングアーツとの交流も踏まえて、2021年度の動きをふりかえます。

文：中野仁詞（キュレーター／神奈川県民ホール・KAAT神奈川芸術劇場）



写真：加藤 健

KAAT EXHIBITION 2021 「志村信裕展 | 游動」

KAATの中スタジオという劇場機能を活用し、「水・月・光」をモチーフに新作8点を制作展示。山形県鶴岡市にある加茂水族館で展示されているクラゲや九十九里浜から眺める満月など、生物や自然の有り様を取材し、志村独自の精鋭な視点で制作された映像群。鑑賞者は400平米の展示空間のなかでゆったりとした時空を堪能しました。

会場 | KAAT 神奈川芸術劇場 中スタジオ
日程 | 2021年9月9日～10月8日
主催 | KAAT 神奈川芸術劇場



写真：岩田 晃

神奈川県民ホール オープンシアター2021 對木裕里展

「手のたび 一では いっておいで」

對木裕里は1987年生まれ。神奈川県箱根町出身。有機的で不思議な形状、唐突にも感じられる素材の組み合わせ、カラフルな彩色が特色の作家による展示と5月30日には、ワークショップ「つくってみよう! ちらかしと片づけのオブジェ」が開催されました。

会場 | 神奈川県民ホール ギャラリー
日程 | 2021年5月26日～6月5日
主催 | 神奈川県民ホール

ART

2021年にオープンした、演劇やコンサートなどを主に行う美術館ではない施設で、二つの展覧会が開催されました。一つは、2021年10月31日開館の那覇文化芸術劇場なはーと（以下「なはーと」）そして県下では2021年9月5日開館の小田原三の丸ホールです。

なはーとの開館記念展は、塩田千春「いのちのかたち」。塩田千春は、神奈川県民ホールギャラリーでの「沈黙から」（07年）、KAATでの第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館帰国記念展「鍵のかかった部屋」（16年）で大型インスタレーションを展示した、神奈川ゆかりの作家です。神奈川での展覧会でも、生と死という壮大なテーマを、大量の糸や窓ガラス、鍵といったリアルで表現し、鑑賞者に大きな衝撃を与えました。一方、「いのちのかたち」では作品のマテリアルとして、

焼失した首里城の赤瓦や住民の方々から寄せられた10000通以上のメッセージ（テーマは「希望」、沖縄の人々が使っていたおもちゃ、写真などのアイテムを赤と白の大量の糸で編み込みました。沖縄の人々の過去と現在を現代美術の文脈で紹介し、神奈川での展示とのつながりも垣間見られる展示でした。

小田原三の丸ホールで開催されたのは、4人の作家で構成されたグループ展「コネクションズーさまざまな交差展」。作家は、神奈川在住で動物を等身大の姿で制作する彫刻家の三沢厚彦、にぎやかでユーモアあふれる家族写真で知られ、映画『浅田家!』の主人公としても取り上げられた浅田政志、2021年のKAAT EXHIBITIONで光と映像からなる壮大なインスタレーションを制作展示した志村信裕、2014～15年県民ホールギャラリーで、5室1300平米の広大なスペースを最大に活用し「サイエンス/フィクション」と題する個展を開催した八木良太です。小田原は、神奈川では西湘地区にあり、歴史的には北条早雲（伊勢新九郎）を祖として関東一帯を治めた北条氏の居城・小田原城があります。小田原港から水揚げされる新鮮な魚や加工品である蒲鉾、干物、そして箱根細工など水産業や工芸品も、つとに知られています。この展覧会で、

浅田は、小田原市内で蒲鉾製造、干物製造の家族、商店街の仲間たち、小田原城の観光ガイド、三沢厚彦らが彫刻を制作する材木店ら取材し、まさに小田原の顔を撮影した10点の新作《小田原町人写巻》(21年)を発表。志村は、近年ドキュメンタリー作品を制作しており、この手法で市内の蒲鉾工場を取材した新作映像《Odawara Kamaboko》(22年)を制作展示しました。そして、赤い靴、木漏れ日、花火など志村がこれまで発表した映像をパフォーミングアーツの舞台美術として再構成し松岡大(ダンス)、武田直之(音楽)とのコラボレーションも開催されました。

2021年、我々の心に大きく残るイベントのトップは東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会でしょう。この一大イベントの開会式と閉会式で振付ディレクター(Director of Choreography)を務めた平原慎太郎は、2007年の塩田千春「沈黙から」を鑑賞以来、県民ホールギャラリーでの企画展における現代美術と身体とが交流する表現を模索してきました。そして「日常ノワケあり」(11年)では、ニューヨーク在住の3人の出品作家が制作したインスタレーションとのコラボレーションとなるダンスパフォーマンスで新作の「昼夜転換癖」を発表しました。その後も平原は、出品作家の



Artists in FAS 2021滞在制作風景 写真提供：藤沢市アーツスペース

「Artists in FAS 2021 入選アーティストによる 成果発表展」

藤沢市アーツスペース(FAS)の制作・展示支援プログラム「Artists in FAS」。2016年にスタートし、今年度で6回目を迎え、若手作家の4名、井上拓哉、栗田大地、宙宙、羅絲佳が制作滞在中、新作を展示しました。このレジデンス・プログラムは、絵画、立体、インスタレーション、パフォーマンスなど、表現ジャンルが問われない公募で、外部審査員による審査のもと、選出されたアーティストに作品の制作と展示の機会が与えられます。

会場 | 藤沢市アーツスペース
日程 | 2021年10月23日～2022年1月16日
主催 | 藤沢市、藤沢市教育委員会

開館30周年記念 「物語る 遠藤彰子展」

神話の世界や物語性を内包した1000号や1500号などの大型作品を中心に、新作を含め、数々の代表作品を紹介。圧倒的な存在感と深いストーリー性を秘めた遠藤独自の世界を表現しました。1986年に、『遠い日』により画家の登竜門とされる安井賞を受賞し、常に大作を描き続ける画家の代表作が一堂に展示され、鑑賞者は遠藤の世界に包みこまれているようでした。

会場 | 平塚市美術館
日程 | 2021年10月2日～12月12日
主催 | 平塚市美術館

一人播磨みどりを起用し作品を制作しています。この取り組みに続き、K A A Tでは、大量の赤い糸が張りめぐらされた、塩田千春展「鍵のかかった部屋」で塩田と平原とのコラボレーション《のぞき》(16年)が実現されています。

県民ホールギャラリーで2020年～21年に開催された企画展、大山エンリコイサム「夜光雲」は、まだ記憶に新しい展覧会です。大山は、ペインティング、パフォーマンス、インスタレーションという3つの方面で活躍を続ける作家ですが、2022年の大相撲初場所所で横綱照ノ富士の化粧まわしを制作し、展示室での作品発表という美術作品の枠組みを超越した斬新な活動が話題となりました。

一般的に、美術展示を主な活動とする美術館、ギャラリーのディレクターや学芸員(キュレーター)は美術の展示を基軸に事業を展開しています。当財団では、県民ホールギャラリーという展示スペースとK A A Tのスタジオやアトリウムなどを活用して、美術とダンス、音楽、リレーディングなど芸術ジャンルの領域横断的な企画を実施してきました。この展開の基軸となるのは芸術総監督の一柳慧、K A A T前芸術監督・白井晃、現芸術監督・長塚圭史という3人の指導力によるところが大きいといえます。劇場、ホールの名を冠さ

れた施設は、パフォーミングアーツの実現の場が一般的ですが、那覇市のなはーとや小田原三の丸ホールの事例に見られる通り、芸術監督の思想をもってジャンルを貫通する独自のソフトウェアの制作手法が、近年国内に広がってきたといえます。

これらの芸術ジャンル横断のプログラムでは次のように3つの「交流」を生み出すこととなります。

(1) 美術、パフォーミングアーツのそれぞれの要素に興味をもつ鑑賞者が、同一現場でコラボレーション作品を鑑賞することによる交流。

(2) 美術作品が展示される現場においてアイデアを出し合い共同で取り組む美術作家、振付家、演出家、テクニカルスタッフなど創造する者同士の交流。

(3) 舞台作品を企画するプロデューサーや美術展におけるキュレーターが、時間芸術と空間芸術の交流を前提に、それぞれがセレクトするアーティストなどと企画をする際に生まれる交流。

これらの交流に通底することは、空間(芸術)と時間(芸術)が交差し、評価の定まった芸術作品の価値を再確認すると同時に、実験的な芸術作品を創造することを試み、社会のなかに新たな価値を投げかけることによって、私たちの日常に刺激をもたらしているということです。

アートシーン ▶ プレイバック

2021年度の演劇プログラムをふりかえる

長引くコロナ禍において、神奈川の文化施設は地域と文化をつなぐ取り組みを行ってきました。
自分たちに何ができるのか、今ここで何をすべきなのか——県内の文化施設に焦点をあて、2021年度の活動をふりかえます。

文：河野桃子（ライター）

PLAY

STスポット

劇場を再発見する試みを実施した、STスポット。主催するオープンデーvol.1「場所と音楽—劇場でつくる—」を開催。作曲家の西井夕紀子（きさい ゆきこ）をディレクターに迎え、ゲストアーティストが参加。さらに観客からも曲づくりのアイデアを募ったり、アーティストと観客が一緒に振付を考えたりした後、できあがった曲とダンスパフォーマンスを公開。観客とともに創作から発表までのプロセスをたどりました。

住所 | 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜 STビルB1



出演：田中哲司／松田龍平、笹本玲奈／石橋静河ほか 写真：阿久津知宏

KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース 『近松心中物語』

新たにKAAT芸術監督に就任した長塚圭史による演出にて上演。戦後を代表する劇作家・秋元松代の代表作である本作は、故・蜷川幸雄の演出により千回以上も上演され、「演劇界の金字塔」とも称されました。長塚は強い信頼を寄せる田中哲司らを出演者に迎え、あえてその壁に挑みました。劇場空間の細部にこだわり、芸術監督としての意気込みが伝わる公演でした。

会場 | KAAT 神奈川芸術劇場 ホール
日程 | 2021年9月4日～9月20日
他4劇場にて上演（10月16日まで）
主催 | KAAT 神奈川芸術劇場



オープンデーvol.1「場所と音楽—劇場でつくる—」

新型コロナウイルスの感染拡大によって、数々の公演が延期・中止になりました。その状況のなかでも、それぞれの文化施設が「自分たちは何ができるか」を試行錯誤しながら実践してきた一年でした。

県内の舞台芸術の大きな拠点であるKAATにとって、2021年は変革の年でした。4月に芸術監督を白井晃から長塚圭史に引き継ぎ、劇場にシーズン制を導入。4～6月の「フレッシュ」には前年度に上演できなかったリーディング公演『ボルノグラフィ』や『未練の幽霊と怪物—挫波「敦賀」—』を上演した後、夏に「キッズ・プログラム」を実施。そして1ヶ月以上のインターバルを設けて心機一転し、ついに8月末にメインシーズン「冒」が開幕しました。1作目の『湊横濱荒挽歌（みなとよこはまあらわんげ）』新粧・三人吉三は横濱を舞台にアウトローたちの攻防を描き、「冒」の一文に込められた「飛び出す、はみ出す、突き進む」を体現しようとする新作でした。2作目の『近松心中物語』は、「演劇界の金字塔」とも呼ばれた作品の演出に新芸術監督・長塚自らが挑みました。先行きが見えないなかでも、「冒」の名にふさわしいエネルギーを感じられる作品の数々が上演されました。今後のラインアップにも期待が高まります。



秩父宮記念市民会館で行われたWS「夏休みだよ!ホールdeわくどき!舞台体験2021 演劇クラス」

急な坂スタジオ

演出家・振付家の山下恵実による子ども向けワークショップ「こどものあそび場／おどり場」(写真は同内容で埼玉の秩父宮記念市民会館で行われたものは、「急な坂スタジオ」が行う「急な坂アトリエ」の一環です。スタジオ内の一室を特別料金で提供するなど制作・創作にかかる様々なサポートを行い、子ども向けワークショップを開催する企画です。小学生以上を対象にした無料参加のワークショップでは、子どもが参加する様子を親が見学することができ、閉塞感のあるコロナ禍でも子どもが楽しむ姿を見守ることができる場をつくる試みでした。

住所 | 神奈川県横浜市中区老松町26-1

若葉町ウォーフ (WAKABACHO WHARF)

地域の方々に劇場でアートを楽しんでもらう「まちなかギャラリ」は2021年で3年目を迎え、近隣で活動するアーティストの作品展示など、地域とアートを結ぶ企画を続けてきました。10月には500枚のマスク(お面)の土台を近隣に配布し、装飾を施してもらい展示するプロジェクト「マスクの逆襲」の第2回を実施。イベント「関内外 OPEN!」にも出張参加し、地域のイベントとして定着しつつあります。

住所 | 神奈川県横浜市中区若葉町3-47-1



「マスクの逆襲〜まいとしふえるおめんてん〜」



「パンとバラで退屈を飾って、わたしが明日も生きることを耐える。」写真: 牧野晃晃

神奈川県立青少年センター 紅葉坂ホール・スタジオ HIKARI

一年を通して若手舞台芸術人材の発掘と育成を目指す「マグカルシアター」を実施。ラインアップの一つである、趣向「パンとバラで退屈を飾って、わたしが明日も生きることを耐える。」は年末に上演され、閉塞感のある空間から、物理的に劇場の扉を開け放ち外へ出ていく様子は、コロナ禍から解放されたんとする希望のようにも感じました。

住所 | 神奈川県横浜市中区紅葉ヶ丘9-1

横浜の民間アートセンターである若葉町ウォーフは、地域や近隣文化が感じられました。

横浜の民間アートセンターである若葉町ウォーフは、地域や近隣文化が感じられました。

横浜の民間アートセンターである若葉町ウォーフは、地域や近隣文化が感じられました。

施設との関わりを大事にしてきました。新型コロナウイルス拡大以後は「何があっても施設を開けてはいけない」と考え、入場無料で誰でも入れる地域の「空き地」として施設併設の劇場を活用する「空き地プロジェクト」を展開、その一環として近隣で活動するアーティストたちに壁画を描いてもらうなど、工夫をしながら、継続して地域とアーティストを結び試みを行っています。

急な坂スタジオは、稽古場の運営などアーティストの創造支援に力を入れています。コロナ禍で「アーティストたちの活動の場がなくなってしまう」と危機感を感じ、稽古場が見つけられずに困っているアーティストをサポートする新事業「急な坂アトリエ」を開始。上演がままならず稽古場の利用を行えないアーティストの相談に乗ることに注力し、公演と

といった目に見えるところだけではなくバックアップは、アーティストたちにとって心強いものだったでしょう。また、地域の親子連れがアートに触れられる機会をなんとかつくりたいと、6月に「急な坂アトリエ」に参加した山下恵実によるワークショップを企画。様々なかたちでアーティストを下支えしました。

そして、コロナ禍以降、客席数を半分に制限し続けているのが、神奈川県立青少年センターが運営する紅葉坂ホールとスタジオエクスです。青少年センターという性質上、生徒たちの安全を最優先すると同時に発表の機会を奪わないよう、青少年向けのものは入場者を限定して公開。高校演劇の県大会はマスクをしたままの上演としました。できる限り地域の文化芸術活動を支えるため、施設にとどまらずワークショップや研修会に出向いたりもしています。また、演劇やダンスの舞台上演を通して若手舞台芸術人材の発掘と育成を目指す年間プログラム「マグカルシアター」は、月に約1〜4団体が公演を実施しました。

どの施設でも、文化芸術活動を様々な方法で支え、安全を守りながら地域の方々に文化芸術に接してもらえよう活動を積み重ねた一年でした。



写真：平舘 平



シー・バイ・シー

C×C 作曲家が 作曲家を訪ねる旅

——作曲家・川上統がサン＝サーンスを訪ねて

聞き手・文：猪上杉子

写真：大野隆介



川上 統

[かわかみ・おさむ] 1979年、東京生まれ。広島在住。作曲作品は170曲以上にのぼり、組曲『甲殻』をはじめ曲名に生物の名がつく作品が多い。チェロやピアノや打楽器を用いた即興も多く行う。2003年第20回現音新人作曲賞受賞。2009、2012、2015年武生国際音楽祭招待作曲家。エリザベト音楽大学専任講師、国立音楽大学非常勤講師。

サン＝サーンスの組曲『動物の謝肉祭』はどんな音楽？

1835年パリに生まれ、1921年86歳で没したカミーユ・サン＝サーンス。オペラ、交響曲、協奏曲、室内楽、オルガン曲など幅広い分野に何百もの作品を残した。本作品は14の小曲からなり、室内楽曲として作曲された。ピアノ2台・弦楽器・フルート・ピッコロ・クラリネット・ガラスハーモニカ・シロフォンという変則的な楽器編成で、風刺精神、パロディやユーモアがふれる。

県民ホール「C×(シー・バイ)シリーズ」から、過去の偉大な作曲家(Composer)と、今を生きる気鋭の作曲家(Composer)が交錯する「C×C 作曲家が作曲家を訪ねる旅」を紹介します。その第2回「川上統×サン＝サーンス」は2022年1月8日に催され、川上さんの委嘱新作が、没後100年を迎えたサン＝サーンスの『動物の謝肉祭』と交差しました。動植物を題材にした楽曲が多いことで知られる川上さんですが、『動物の謝肉祭』と対峙して、同規模の楽器編成(打楽器は増強)で書かれた『ビオタの箱庭』はどんな作品になったのでしょうか。

『カッコー』には『コトドリ』、有名な『白鳥』には白黒反転させる意図で『ワタリガラス』となりました。『サン＝サーンスへの旅』を終えて見出したものについても尋ねてみました。

「作曲する際、完成形を彫り込んでから書くことが常だったのですが、今回は決まったかたちのなかに粗彫りの直感的な願望を入れていく作業となり、それが思いのほかスムーズにいったのは、サン＝サーンスの明朗なイマジネーションに励まされたからと感謝しています。各曲のキャラクターを書き分ける創造性の発揮は、彼にとってもそうだったのだろうと勇気づけられる思いでした。彼の『水族館』と私の『ウォードの箱』には、予想していた以上にガラスケースの透明感という共通性が現れて、自分でも驚きました。」

1世紀の時を隔てた二人の作曲家の対置から、過去、現在、未来が一つにつながる音楽体験を味わうことのできたコンサートとなりました。

C×C 作曲家が作曲家を訪ねる旅 川上統×サン＝サーンス(没後100年)

会場 | 神奈川県民ホール 小ホール 日程 | 2022年1月8日

- 川上統作曲
組曲『ビオタの箱庭』
- 1 サスライフリの行進
 - 2 ジュゴンとマナー
 - 3 シンゾウ
 - 4 ミツオビアルマジロ
 - 5 パオバブ
 - 6 トビネズミ
 - 7 ウォードの箱
 - 8 フラグメント・ウィウム・コードタム
 - 9 コトドリ
 - 10 キヌガサケ
 - 11 コンドロワディア・リラ
 - 12 ラティメラ
 - 13 ワタリガラス
 - 14 レミングの行進

- サン＝サーンス作曲
組曲『動物の謝肉祭』
- 1 序奏とライオンの王道行進曲
 - 2 雄鶏と雌鶏
 - 3 エミオン・ネまたは高速な動物たち
 - 4 象
 - 5 カンガル
 - 6 水族館
 - 7 耳の長い登場人物
 - 8 森深きのカッコー
 - 9 鳥舎
 - 10 ビアレスト
 - 11 化石
 - 12 白鳥
 - 13 終曲

(公財)神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

五十音順・敬称略(2022年1月31日現在)

賛助会員 法人賛助会員：株式会社アウトエンジニアリング / アズビル株式会社 / 学校法人岩崎学園 / 株式会社ヴォーナル / 株式会社エス・シー・アライアンス / 株式会社NHKアート / 株式会社勝利庵 / 一般財団法人神奈川県教育福祉振興会 / 公益財団法人神奈川県結核予防会 / 株式会社神奈川孔文社 / 株式会社神奈川保健事業社 / 神谷コーポレーション株式会社 / 川本工業株式会社 / かわい商事株式会社 / 株式会社共栄社 / 株式会社KSP / 株式会社合同通信 / 株式会社シグマコミュニケーションズ / 株式会社ジェイコム湘南 神奈川 / 株式会社清光社 / 株式会社Central Mediencie / 月島機械株式会社 / 株式会社テレビ神奈川 / 東工株式会社 / 株式会社日建設計 / 日産自動車株式会社 / 日成工事株式会社 / 日生商工株式会社 / 日総ブレイン株式会社 / 日本発条株式会社 / 株式会社野毛印刷社 / バナソニック・エス・エス・エンジニアリング株式会社 / 平安堂薬局 / 株式会社ホテル・ニューグランド / 一般社団法人本牧関連産業振興協会 / 丸茂電機株式会社 / 三沢電機株式会社 / 森平舞台機構株式会社 / ヤマハサウンドシステム株式会社 / 株式会社有隣堂 / 株式会社豊商會 / 株式会社ユニコーン / 株式会社横浜アーチスト / 横浜新都市センター株式会社 / 横浜信用金庫 / 弁護士法人横浜パートナー法律事務所 / 横浜ビルシステム株式会社 / 株式会社ワイヤーソリューションズ(匿名：3社)
永年個人賛助会員：川村恒明 個人賛助会員：味田健一 / インフタエミ / 岡田博子 / 小川浩 / 黒瀬博晴 / 小山明枝 / 佐々木順子 / 鈴木真由美 / 高岡俊之 / 高野伊久男 / 中澤正正 / 橋本尚子 / 藤原靖也 / 三澤孝至 / 渡邊政彦(匿名：3名)

協賛・協力 能舞台協賛：ナイス株式会社 協力：株式会社局陽軒
個別協賛：アクセンチュア 芸術部 / Accenture Art Salon / ユカ・ツルノ・ギャラリー(匿名：2名)

ご支援のお願い

神奈川芸術文化財団では、芸術を愛する個人の皆様、社会貢献活動に関心のある企業の皆様にお力添えをいただくため、賛助会員制度を設け広くご支援をお願いしています。皆様のご理解とご支援をより多くお願い申し上げます。
○賛助会員：1年を通じて事業全般にご支援をいただきます。
○個別協賛：特定の公演・事業にご支援をいただきます。
○インターネット小口寄付：1口3,000円からインターネットで気軽に寄付いただけます。

特典

○ご芳名を掲載します。○財団主催公演のなかから選定した公演にご招待いたします。
○神奈川芸術プレスをお送りします。○税制上の優遇措置があります。

お問い合わせ・申し込み

(公財)神奈川芸術文化財団 経営企画課
https://www.kanagawa-arts.or.jp/support
電話：045-633-3760 (9:00~17:00/土日祝日・年末年始を除く)



写真：大野隆介



加藤さんが字幕を手がけた『シャルリー』舞台風景 写真(左)：青柳 聡



舞台字幕制作者編

聞き手・文：猪上杉子

通訳・字幕制作者

加藤リツ子

[かとう・りつこ] 舞台通訳(仏語)および舞台や映像の字幕制作(仏語・英語)を手がける。舞台字幕では太陽劇団「堤防の上の鼓手」、ルバージュ演出「887」、ジネール作曲オペラ「シャルリー ～茶色の朝」など。映画の字幕も多数制作。映像好きが高じ、仏企業の役員秘書から転身した。

「舞台裏」で公演を支えるスタッフの「技術」をお伝えする本コーナーの第2回は、音楽堂の室内オペラ・プロジェクト「シャルリー ～茶色の朝」(以下「シャルリー」、2021年10月30、31日日本初演)で日本語字幕を担い、作曲家とのトークセッションでは通訳も担当した加藤リツ子さん。字幕制作という仕事について語っていただきました。

——どのように字幕をつくっていくのか教えてください。

まさに裏方の仕事なので、私が顔を出してお話をするなんてとても緊張します(笑)。「シャルリー」の場合は日本初演でしたが、フランス語での上演は行われていましたので、まずはスクリプト(台本)や歌詞を手に入れます。そして記録映像などを見ながら、「ハコ」と呼ばれる文章に区切っていきます。どこで息を継いでいるか、メロディの流れはどうかなどと照らし合わせて行う重要な作業です。45分ほどの「シャルリー」で約130枚(「枚」と数える)の「ハコ」になります。同じ言葉数でも喋る速度や歌うテンポによってその字幕が表示される秒数(いわゆる「尺」)は違ってきますから、一つひとつの「ハコ」の秒数を計ります。その「尺」に合わせて字幕を付けていくわけです。

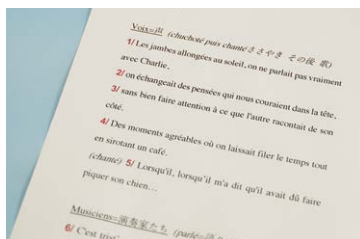
——字幕制作で苦労するのはどんなことですか？

なんといっても「尺」との闘いです。人の目が読んで理解できるのは1秒間に4文字と言われます。表示される間に読み切れること、限られた文字数で意味がわかることが何より大事なことです。ですから美しい言葉遣いにしよう、自分なりに凝った表現を考えよう、とは決して思わないように心がけています。

——舞台通訳もされますが、通訳と字幕制作は異なる姿勢で臨むのですか？

通訳と字幕制作の両方に携わる人は珍しいようですね。限られた字数でわかりやすく伝える字幕と、演出家の意図や考えを俳優や歌手にうまく伝える通訳。一見正反對のように見えますが、どちらも日本人のためにその作品の内容を届ける橋渡しの役目だと思っています。

スクリプトを「ハコ」に区切ることから字幕制作作業が始まる



アンケート項目

1. 神奈川芸術プレスはいかがでしたか。ご意見・ご感想を教えてください。
2. 今号で印象に残った記事を教えてください。
3. 次号以降、読んでみたい特集テーマがあれば教えてください。
4. 今気になっている「ひと」や「こと」、「場所」などがあれば教えてください。
5. 神奈川芸術プレスをどこで手に取りましたか？



WEBアンケートフォームはこちら

神奈川芸術プレス(vol.160)をお読みいただき、ありがとうございました。アンケートにお答えいただいた方の中から、抽選で1組2名様を、2022年6月12日(日)15:00開演「C×Organ オルガン・コンサート・シリーズ ロレンツォ・ギエルミ オルガニシタル」(神奈川県民ホール 小ホール)にご招待します。今後の誌面づくりに生かすため、ぜひご意見・ご感想をお寄せください。

応募方法：「WEBアンケートフォーム」もしくは「はがき」で、アンケートの答えと、メールアドレスを明記のうえ、ご応募ください。
WEBアンケートフォーム：https://krs.bz/kanagawaaf/m?f=426

はがき郵送先：〒231-0023 横浜市中区山下町3-1(公財)神奈川芸術文化財団 神奈川芸術プレス読者アンケート係
回答期限/はがき必着：2022年4月30日(土)

当選発表：厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメール送信をもってさせていただきます。

・当選に関するお問い合わせには回答いたしかねます。

・当選通知メールは、kaf@kanagawa-af.orgのアドレスから送付予定です。

上記ドメインからのメールを受信できるよう、設定をご確認ください。

・メールアドレスの間違い等でメールが送信できない場合は、当選を無効にさせていただきます場合があります。

※お申し込み時にいただいた個人情報は、当選通知以外の目的には使用いたしません。



公益財団法人
神奈川芸術文化財団

神奈川文化プログラム



神奈川芸術プレス vol.160

2022年(令和4年)3月25日 発行

発行：公益財団法人神奈川芸術文化財団

TEL：045-663-3711

企画・制作：公益財団法人神奈川芸術文化財団／株式会社ボイズ／一般社団法人ノマドプロダクション

編集：米津いつか、白尾 芽・中村元哉 (voids)

デザイン：岡部正裕 (voids)＋三浦佑介 (shubidua)

イラストレーション：白尾可奈子

撮影協力：手塚真生 (Andmo)

校正・校閲：聚珍社

印刷：深雪印刷

【禁無断転載・複写】無料配布

※本誌掲載情報は2022年3月10日現在のもの